

だけど、人形達が学ぶ教訓を私達の暮らしにも当てはめれば、このお話は生きたものとなるんだ。イエス様が地上におられた時も、たくさんの子供達が周りに集まって来たって、知っていたかい？ そしてきっと、たくさんの子供達、特に小さな女の子達は、ちっちゃなお人形や、動物のぬいぐるみをだっこしていただろうね。もちろん、昔はわらをつめたものだったから、今みたいにじょうぶでも本物みたくもなかったけど、子供達にとっては、まるで宝物みたいなものだったんだ。イエス様が人形やぬいぐるみを使って、集まって来た子供達に何かの教訓を教えているところを想像してごらんよ。天国に入るのに必要な信仰の実例として、小さな子供を使って説明して下さった時みたいだね。

では子供達、パップエンドーフへの訪問を、楽しんでくれたまえ。そして、クリスマス人形のアナベルと、ブラジル人形ケイラと、着せ替え人形バーバラとビバリー・ヒルズ姉妹、それにいぬのノウジーとクマのブルーノ、それに子ライオンのシュンバが繰り広げるちょっとしたお話から、教訓を学び取ってくれたまえ。



パップエンドーフは、上へ下への大さわぎだった。部屋には、期待に満ちた空気がただよっている。バーバラとビバリー・ヒルズは、鏡の前でおめかししながら得意になっていた。その一方で、ケイラは必死につめをみがき、アナベルは、アクリル製のちりぢりになったかみの毛に何とかしてくしを通そうとしている。

けれども、犬のノウジーはすみの方でむっつりとすわって、空っぽのお皿をなめていた。(これが犬の人生というものさ。) ノウジーは思った。

「シュンバって、狩りがものすごく上手なんですって。」長いブロンドの髪の毛をとかしながら、バーバラ・ヒルズが言った。

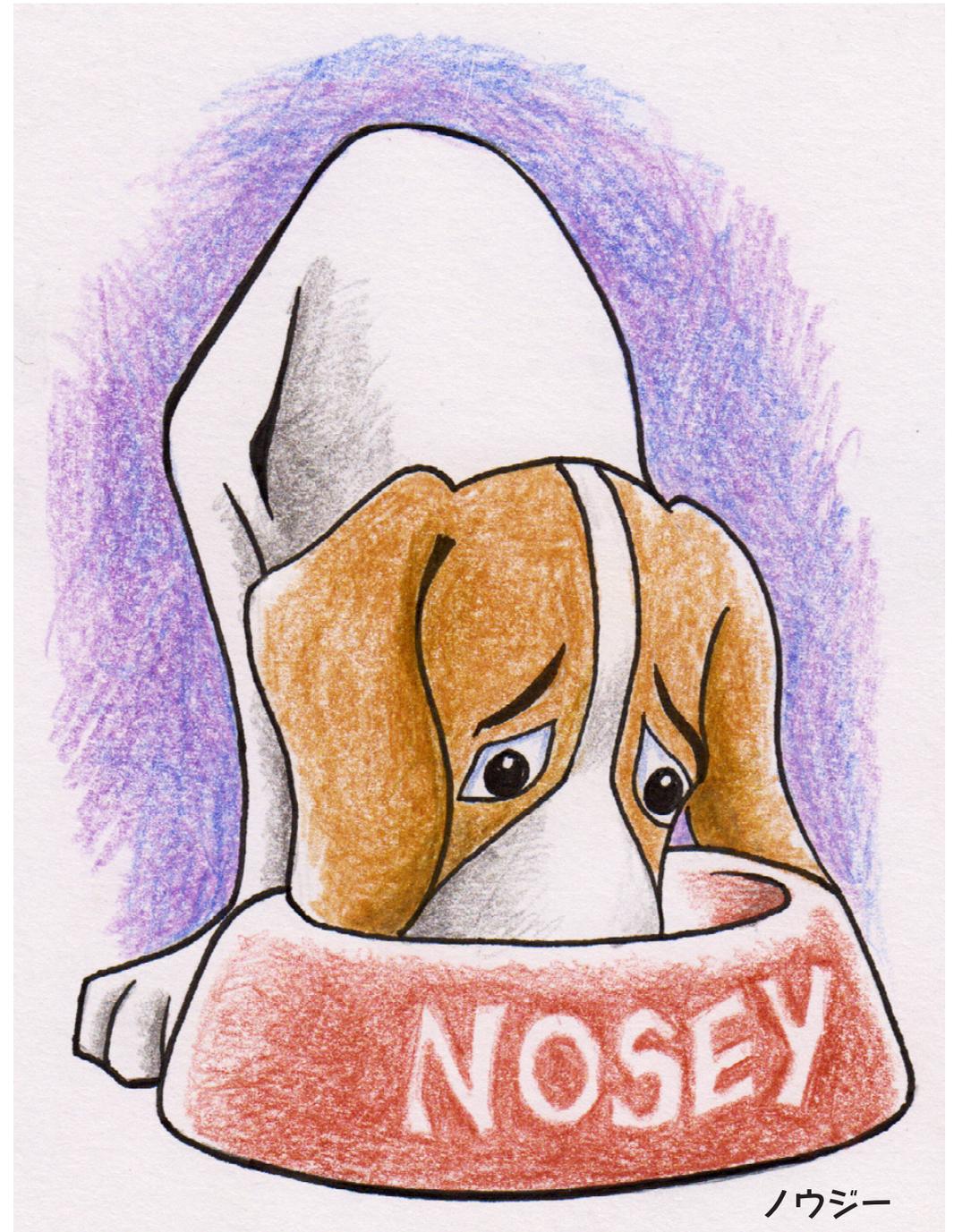
「聞いたわ。」長い黒髪を編みながら、ビバリー・ヒルズが甲高い声で言った。「ネズミやネコを追いかけるだけじゃないんですってね。」

「それに、すごい腕前で、何たって速いんだって！ なまけ者ののろまじゃないことは確かだね。」ケイラも、つめを入念に調べながら、会話に加わった。

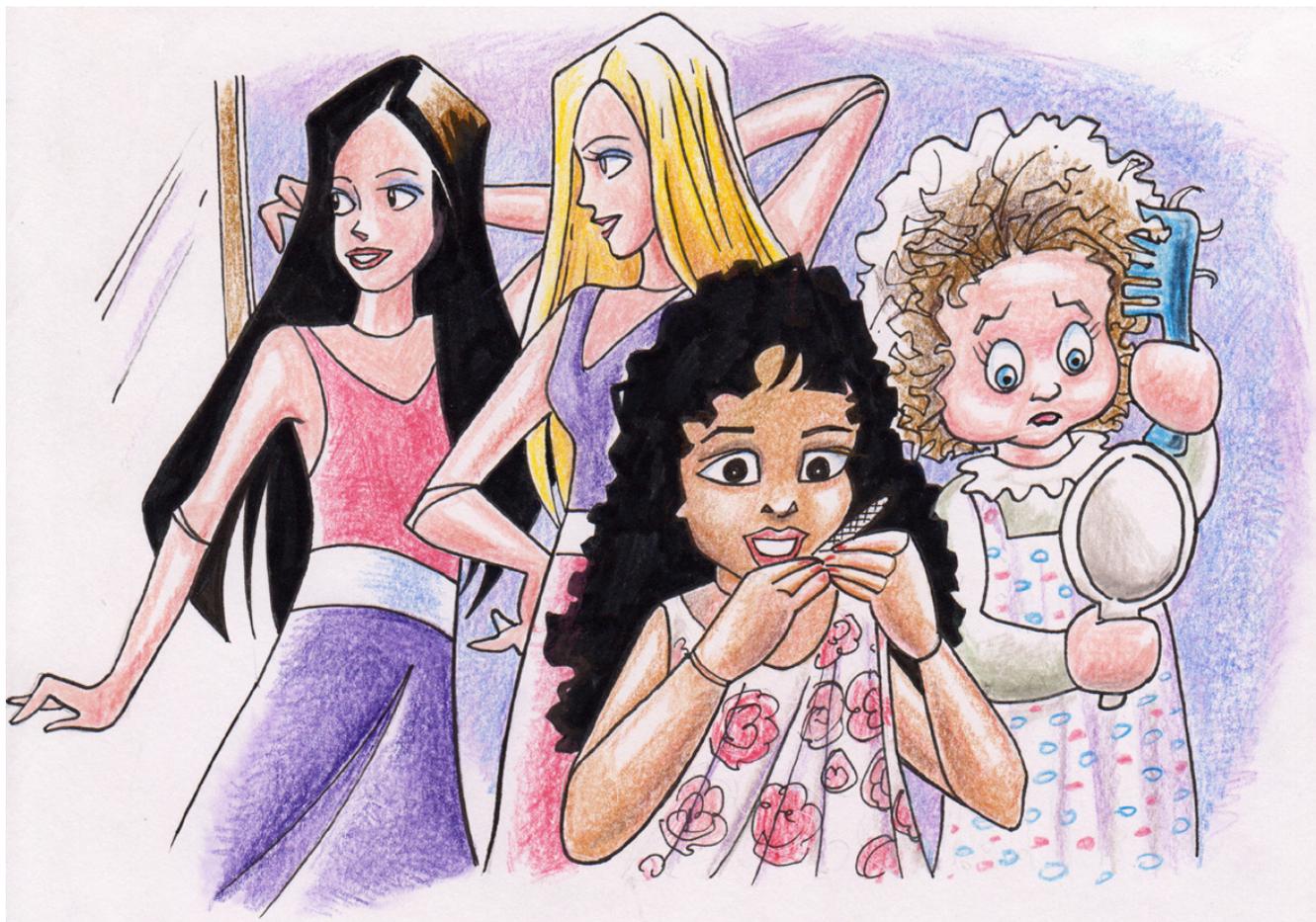
「それに、見たところ・・・」アナベルはそう言いかけて、最近学んだ言葉が効果を発揮できるのを待ってから続けた。「ものすごい番犬なんですって。どろぼうや何かを追いはらってくれるの。」

「ほえるだけじゃないのよね。」と、バーバラ。

「そうそう、ものすごいうなり声をあげるのよ！」ビバリーも言った。



ノウジー



「すごいわ。」と、アナベル。

「その上、シュンバは映画にも出てるし。『ジャングル・キング』にね。」と、バーバラ。

「ええ。ケンがその映画を見に連れて行ってくれたけど、面白かったわ。」ビバリーも言った。

「ところで、ケンはいつ来るの？」ケイラがたずねた。

「明日よ。人間のお昼ご飯が終わったところに来ることになってるわ。2時15分くらいかしらね。この前は、アンジェラが彼を連れて、あの大きな滝に行ったわね。あそこなら、子ライオンのシュンバがものすごく安く買えるらしいのよ。」

「へえ〜。じゃ、行きましょ。」バーバラ・ヒルズが言った。

「言うのは簡単だけど、実際にやるのはむずかしいわよ。人間の女の子があなたをスーツケースに入れて連れて行ってくれることにしない限りはね。アンジェラは、クマのブルーノを連れ歩いたりするわ。」とビバリー。

「じゃあ、何が問題なの？」バーバラがたずねた。

「あなたは、『だっこされる』タイプの人形かしら？」と、ビバリー。

「そうは言えないわね。」とバーバラ。「私達はみんな……って言うか、私達二人は、『着せ替え』タイプの人形だもの。服は何千回でも変えてもらえるだけだよね。」

「まあ、それはどうでもいいわ。最悪の場合には、ケンに連れて行ってもらえばいいもの。そうすれば、すぐに着くわ。」と、ビバリーが言った。

ケイラはあきれた顔で言った。「そうね、彼の神風運転ならあつという間よね。」

「どう思う、ノウジー？」この興奮から取り残されている犬の友達のことを少々気づかいながら、アナベルが言った。

「どうだろうな。つまり、何のことにたい？」ノウジーがぼそっと言った。

「どんなタイプかってことよ。つまり、あなたは、子供達がベッドや旅行に連れて行きたがるような、だっこされるタイプかってこと。」

ノウジーは気難しそうに言った。「そうは思わないな。ぼくは普通、他のたくさんのノウジー達といっしょにたなの上に置かれたままだし。サンタクロースの帽子をかぶったノウジーや、テキサスレンジャーの格好をしたノウジーや、サングラスをかけて野球帽をかぶったラップ風のノウジーなんかね。」

「それなら、ずいぶん関心をもらってるじゃないの。たなの上にいるなんてね。私やビバリーなんかより、ずっと注目されてるわ。」バーバラ・ヒルズが言った。

「それはきっと、私達が立てないからよ。何かに立てかけるとしても、大変なもの。」とビバリー。

「それは、足がすごく長くてやせてて、頭が大きい過ぎるせいで。バランスが悪いんだわ。」とケイラ。

「まあまあ・・・。ぼくが言いたいのは、個人的にあまり関心をもらわないってことだよ。」とノウジー。

「今いるノウジーはあなただけでよかったわ。」とアナベル。「私達のうちの犬勢をチャリティーであげてしまっただけはね。何て言うんだっけ？」

「バザーよ。」ケイラがきっぱりとした口調で答えた。

「そうそう。」とアナベル。

「だけど、たくさんの友達がいなくなっちゃったな。つまりさ、他の犬達のことだよ。」とノウジー。

「あなたにはまだ、ディギティーターグ（かっこいい犬という意味）がいるじゃない。」バーバラ・ヒルズが言った。

「まあね。だけど、やつは出かけてばかりで、ほとんどうちにいないよ。」

「それはそうと、シュンバが来ることを、どう思ってるのよ、ノウジー？ すごいと思わない？」とアナベル。

ノウジーはちょっとふくれっ面気味に、ゆっくりと頭を横に振った。そして、またもや空のお皿をペロツとなめた。

「どうしたのよ、ノウジー？」ケイラが心配そうにたずねた。

ノウジーは深く息をすいこむと、ブラインドのすき間から差しこんでくる夕日の明かりを考え深く見つめた。

ノウジーはせきばらいをして、話し始めた。「ぼくが思うに・・・。例の『すばらしい』シュンバについては、いくつか知っておくべきことがある・・・」



「みんな、元気？」

アンジェラの陽気なあいさつで、静けさは破られた。

「みんな、どこ？」

ふとんをめくると、アンジェラはベッドのかげに向かって言った。「ケイラ！ 一体こんな所で、何をしてるの？ いつもはドールハウスにいるじゃない？」

ケイラはそうと刃りを見回した。「もう来た？」

「だれが？」

「シュンバよ。」

「あ～、ええ。シュンバを新しい遊び仲間を紹介しようと思ってたのに。お茶の用意ができてないわね。ヒルズ姉妹のアパートは散らかってるし、ドールハウスも空だわ。一体どうしたの？」

ケイラはそわそわしながらせきばらいをすると、きれいにマニキュアがぬられたつめをかんだ。

「何かこまったことでもあるの？」アンジェラがたずねた。

「あ、いや・・・。ただ、その、私達・・・。」ケイラは言葉をつまらせた。その時、ドリスとプリシラも、期待した表情で部屋に入って来た。

「暖かい歓迎はどうだったの？」ドリスがたずねた。

アンジェラは肩をすくめた。「全く、訳が分かんないわ。アナベルと他のみんなも、かくれてるみたいよ。」

「人間達が来たわ。」たなの上にある靴箱の中から外をのぞきながら、アナベルがバーバラとビバリーにそうとささやいた。

「シュンバは、連れてきた？」バーバラがたずねた。

「そのようね。ビニール袋に入ってるわ。」ビバリーが言った。

「女の子達が袋を開けませんように。さもないと、私達はボロ布同然にされてしまうわ。」

「それは、あなたのことでしょ。私達・・・つまり、私とビバリーは、ビニールでできてるのよ。ケイラと同じにね。」

「ところで、シュンバは何でできてるの？」バーバラがたずねた。

「分からないわ。おそらくはブルーノと同じよ。毛羽立ったベージュの布か何かじゃないかしら。」とアナベル。

「じゃあ私達、何をそんなにこわがってるのよ？」ビバリーが言った。

「だって、シュンバはビニールだって食べちゃうらしいわよ！」アナベルがなげきながら言いました。

バーバラが指を口にあって言いました。「シーッ！ 大声をあげないで。」

突然靴箱がゆれると、アンジェラの顔がこわばった
人形達の上にヌッと現れた。

「あなた達、一体ここで何をしているのよ？ 新しい
仲間が来たって、知ってるでしょ？」

アナベルとバーバラとビバリーは、不安そうに
うなずいた。

「じゃあ少なくとも、彼にはくつろいだ気持ちに
させてあげてよね。ところで、ノウジーはどこかし
ら？」

人形達は顔を見合わせて、肩をすくめた。

「まあ、いいわ。」アンジェラはぶっきらぼうに
そう言うと、3人の人形を集めてベッドの上の
ケイラのとなりに並べた。「ノウジーがいてもい
なくても、新しい仲間のために、ささやかな歓迎パ
ーティーを始めるわよ。」

ドリスはお茶の用意をし、プリシラはアンジェラに
はさみを渡した。アンジェラは、しきりに外に出た
がっているシュンバの入ったビニール袋を切って
開けた。すると、ベッドにすわっている人形達は
こわばって、たがいにしがみつかった。

ドリスが言った。「一体どうしたのよ？ 昨夜プリ
シラと私が、アンジェラが子ライオンのシュンバを
連れて来るって言った時は、みんなわくわくしてた
じゃない。」

「それはそうんだけど・・・。」そう言いかけると、
アンジェラがシュンバをベッドの上に置いたので、
アナベルは悲鳴をあげた。

シュンバは空気ににおいをかぐと、用心深く身を
ふせた。

「おそいかかってくるわ。」ケイラが金切り声をあげた。

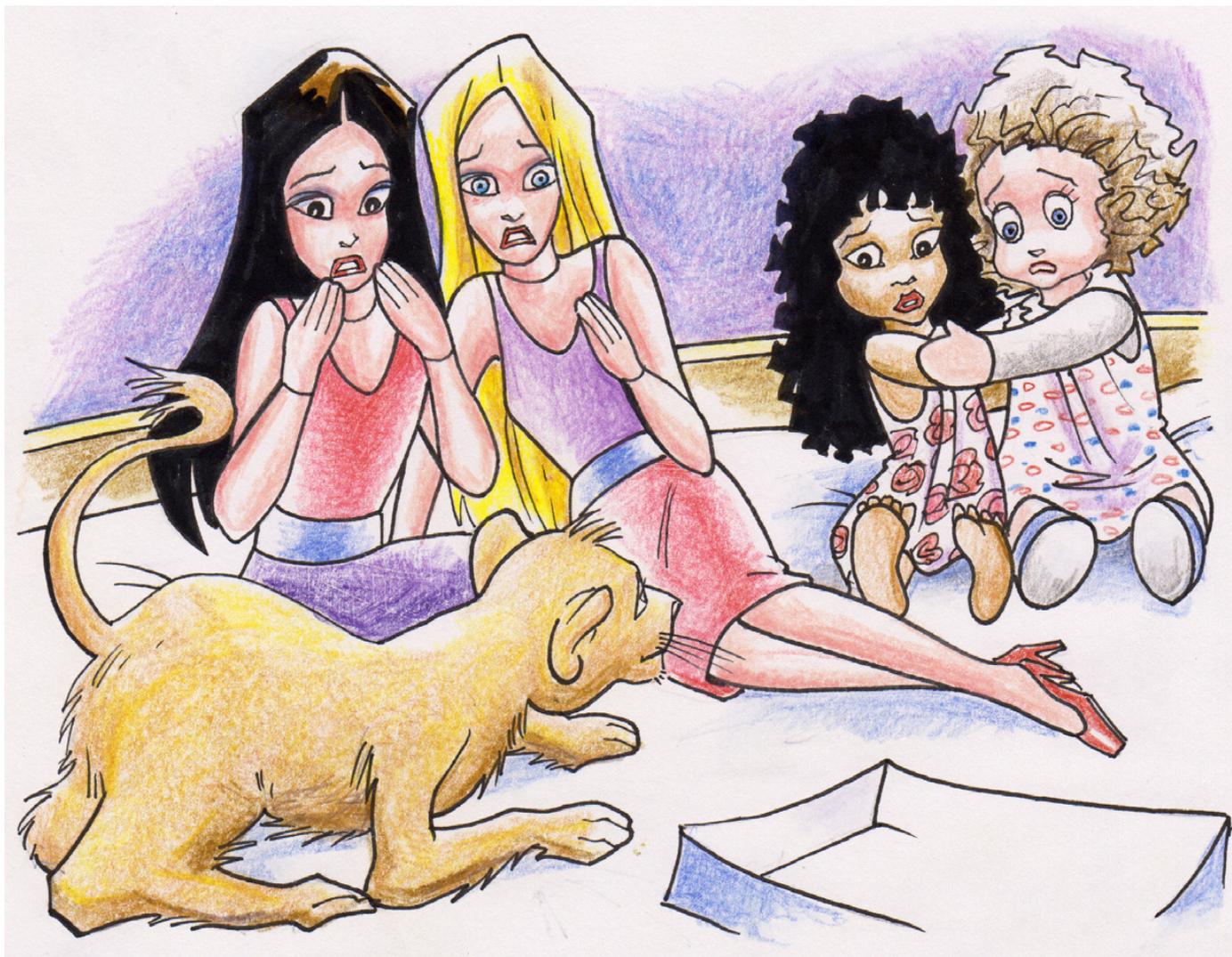
アンジェラが言った。「そんなことしないわよ。ただ、あなた達が何でそんなにこわがってるのか、分からないのよ。」

「何てひどい歓迎の仕方かしら。きっとシュンバは居心地悪く感じてるわ。」プリシラが言った。

バーバラが言った。「私達にどうしろって言うのよ？ 生きたまま食べられてしまうほうが、よっぽどひどい気分だわ。」

シュンバは落ち着いてくると、ベッドの上に転がって、4人の人形達にほほえんだ。ドリスが言った。「一体どうしてそんなことを言うのよ？ 見てごらんさない。彼はただ、友達になりたいだけよ。」

「そうね、おとなしそうだわ。でも、私達が寝静まったころ、私達は彼の夜食になるんだわ。」ビバリーが言った。



「ひどいわ。一体全体、だれの入れ知恵なの？」 アンジェラがたずねた。

「ノウジーよ。彼がそう言っていたの・・・。」 バーバラが話し始めた。

「ノウジー？ 一体彼はどこへ行ったのよ？」 プリシラが口をはさんだ。

「まあ、私、ノウジーがいないことにさえ、気がつかなかったわ。」とドリス。

「それが問題なのよ。」 ビバリーが小声で言った。

プリシラが言った。「ブルーノにあいさつしに下に行ったのかしら。あの二匹は仲がいいから。それか、ディギティーダーグと出かけたのかも。」

「ところで、ノウジーが何て言ったの？」 アンジェラが問いつめた。

バーバラとビバリーとケイラは、アナベルが説明するものだとおもって彼女の方を見た。

「ノ、ノウジーが・・・、え〜っと・・・シュ、シュンバはすごく意地悪で、私達におそいかかってきて、夜の間に食べちゃうぞとか、そんなことを言ったのよ。」

アンジェラはまたで部屋の入口の方に歩いて行くと、部屋の外に出て、1階に向かってどなった。「ノウジー！ 今すぐ、出て来なさい！」

返事はなかった。

「出て来ないと、今夜は骨をあげないわよ！」

すると、そばのリネン用の戸だなの中からクンクンという声が聞こえてきた。戸だなの扉がギ〜ッと開くと、悲しげな子犬がアンジェラを見上げている。

「一体これは、どういうことなの？ シュンバについて、みんながこわがるような話をするなんて。こっちへ出て来なさい。」

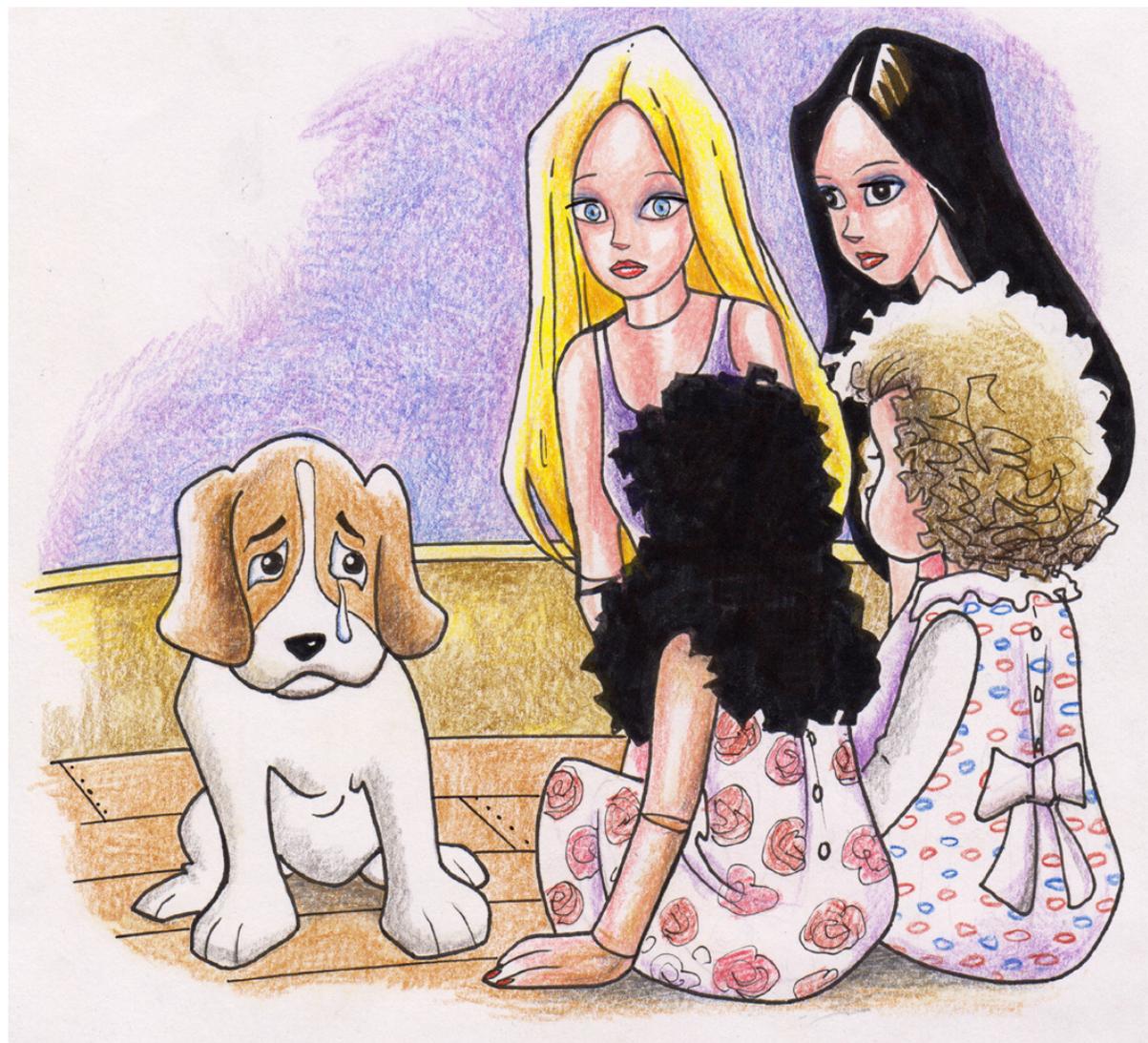


「・・・ということだったんだ。」 アンジェラとドリスとプリシラと4人の人形と、とまどっているシュンバにかこ囲まれて、ノウジーははずかしそうに言った。

「みんなが『シュンバはね』、『シュンバはね』って、すごい映画にも出たとか、ちやほやするから、焼きもちを焼いちゃったんだよ。」

プリシラがまじめな表情で言った。「ねえ、ノウジー。あなたはすごい映画に出たりとかはしてないけど、コーヒーカップや誕生カードに出てるのよ。」

ドリスも言った。「それに、世界中の子供達はあなたが大好きよ。みんなを笑わせてくれるじゃない。子供達はあなたのことをこわがってもいないし。」





「ぼくよりも、ずっとすごいじゃないか。」 シュンバがニヤリと笑いながらつぶやいた。

「それに、あなたにはもっとたくさんの経験があるわ。だって、あなたはもう、少なくとも50年は存在しているもの。」 アンジェラも言った。

「それなのに、ちっとも年を取ってないなんてね。」とバーバラ。

「そうよ。他のたくさんの犬とちがってね。」とビバリー。

「ふつうだったら、とっくにお払い箱だものね。」 ケイラも言った。

「じゃあ、みんなにあやまるのね。それから、ブルーノが来たら、シュンバの初めての夜のために祈りましょうか。」とアンジェラが言った。

「賛成！」 みんながいっせいに言った。



さて、ノウジーとシュンバがまもなく親友になったことを聞けば、みんなも喜んでくれるだろう。シュンバはノウジーにライオン式の狩りの仕方を教え、ノウジーはシュンバに骨のかくし方を教えたんだよ。

そして、人形のアナベルとバーバラとビバリーとケイラはみんな、もっとノウジーのことを感謝することを学んだ。そして、ノウジーの前で他の者の良い所を話す時は、もっと気をつかって、彼のことも大好きだよって安心させてあげることを学んだんだ。

そしてノウジーは、他の者達が賞賛されていても、焼きもちを焼かないことを学んだよ。

文:ギルバート・フェンタン 絵:ジェレミー
デザイン:ロイ・エバンス

出版:マイ・ワンダー・スタジオ

Copyright © 2021年、ファミリーインターナショナル
"Puppendorf 01: Scary Shumba"--Japanese

関連の読み物はこちら ⇒ 子供のための物語、尊敬となれ合い